

# 河川氾濫から命を守る

河川研究部 水害研究室

室長 伊藤 弘之 主任研究官 山本 晶 研究官 湯浅 直美



(キーワード) 洪水、大規模氾濫、避難方法

## 1. はじめに

平成27年9月関東・東北豪雨では、東日本各地で大きな被害が発生した。特に10日の昼に鬼怒川の堤防が決壊した茨城県常総市では約40km<sup>2</sup>が浸水し、2名が犠牲となった。さらに、多くの住民が逃げ遅れ、流失する家屋から住人をヘリコプターが救助する場面も見られた。また、10日の夜からは常総市南部でも内水氾濫や決壊氾濫流による大規模な浸水が発生し、多くの世帯が孤立したため、翌11日以降もヘリコプターとボートによる大規模な救助が行われた。結果、4000名以上が救助されたが、これは風や雨の条件の良さや決壊が日中であった事、ヘリポートが近くにあった事など、ヘリコプターの飛行や救助活動に有利な条件が揃っていた中での救助成果であり、仮に悪条件下であれば多くの犠牲者が発生しかねない危険な状況であったことを認識する必要がある。

以下では、河川氾濫により生じた危険事象を概説するとともに、命を守るための各自が認識すべき事項について記述する。

## 2. 堤防決壊による家屋の倒壊・流失

常総市上三坂においては10日12時50分頃に越水による堤防決壊が発生し、間もなく決壊部前面にあった家屋が倒壊・流失しはじめた。家屋の流出状況等の調査を行ったところ、比高約4m以下程度の堤防の決壊により生じた氾濫流により決壊部から150m程度まで、約20戸の建物が流失等したことが確認された(図-1参照)。より大きな堤防が決壊した場合にはより広範囲での家屋流失等が予想されるが、どの程度の範囲でこのような事態が起きるのかを住民等が事前にイメージすることは困難であり、水平避難するための目安が必要となる。

## 3. 氾濫流の到達等による大規模な浸水

10日昼に発生した氾濫流は堤内地を南下するとともに八間堀川の内水氾濫と相まって、常総市の南部まで広範囲に浸水が生じた。これにより、4,000戸以上の世帯で床上以上の浸水が発生し、浸水家屋において一時孤立状態が発生したが、八間堀排水機場や各地より参集した排水ポンプ車による排水活動により19日には概ね浸水は解消された。ただし、停電や断水が起きたうえ夏場でもあり、エアコン等家電やトイレが使用できない状態での生活環境は劣悪であり、浸水解消が遅れた場合には健康被害等が生じた危険性もあった。

## 4. おわりに

今回の災害を受け国土交通省では、「水防災意識社会再構築ビジョン」を打ち出すとともに、その中で住民が自らリスクを察知し主体的に避難できるような情報提供の充実を図ることとしている。この機会に、今一度自宅の位置をハザードマップ等で確認し、万が一の事態や、自らの命を守る方法について考えていただきたい。

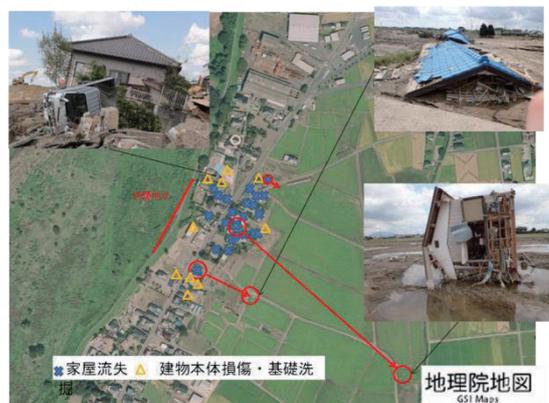


図-1 家屋の流失状況